



ブリュッゲルの「子供の遊戯」 12

森 洋子

今回は77から91までの遊戯を論じるが、ブリュッゲルの「子供の遊戯」に画かれた全部で91種類の遊戯の説明は終りとなる（ただし本連載の最終回は次回となろう）。ところで77から89までの遊戯は画面の右上に集中している。その突き当りにはかすかにゴシック聖堂がみられるが、アントウェルペンの聖母マリア聖堂であろうか。町並みはその聖堂に向って遠近法的に画かれていることに注目したい（図1）。さらに子供たちの姿も奥行の進行と同時に、縮小されていく。そのため個々の遊戯の内容を

厳密に説明するのは困難な場面も少なくない。しかし驚くべきことにブリュッゲルはどんなに小さく画く場面でも、決してなおざりにすることなく、最後まで遊ぶ子供たちを生々とした姿で画いていたのである。

また画面全体に子供の遊戯が点在しているにもかかわらず、子供たちは町並みと同様に、画面右上の焦点にむかって対角線上に、遠近法的に位置づけられていたことだった。そしてその点がこの絵の構図の与える統一感の秘密ではなからうか。

77 行列のゲーム Processie spelen (図2)

四人の子供が棒の先に白い紙かボロ布をつけて、旗行列ごっこをしている。ただし後ろのより年少の二人は松明のようなものを掲げている。四人ともみな神妙な表情をして厳かに歩く。おそらく彼らは宗教行列を真似し、キッチン・ラテンといわれる聞きかじりのラテン語のミ

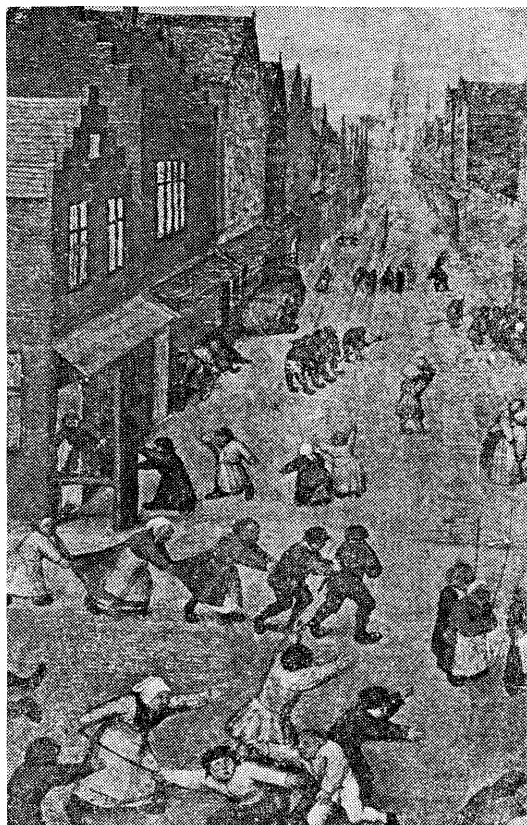


図1 ブリューゲル「子供の遊戯」(部分)
1560年 油彩 ウィーン美術史美術館

サ曲を唱っているのであろう。サルトリは六月二十四日の洗礼者聖ヨハネ誕生の祝日か、八月末の提燈行列ではないか、と推定している^{注1}。だが図版でこの部分を厳密に調べてみると、第一、第二の子供たちの手にしているのは提燈というよりは聖旗であろう。実際、十七世紀のオランダの銅版画(図3)にみられる提燈行列とは幾分その外見が異なる。とすると六月の聖体行列の可能性も考えられる。聖体行列の祝日は復活祭から数えて61日目にあたるため、年によって異なるがちょうど六月某日となる。しかしブリューゲルの第三、第四の子供のもつ棒の旗が剝落によって今日見えなくなったのではなく、松明を掲げていると仮定すれば、六月二十四日の洗礼者聖ヨハネの祝日前夜祭の祝火に関連すると思われるだろうか。この行列のはるか後方

に、85の「洗礼者聖ヨハネの祝火」、さらに87の「松明運び」がみられる。こうしてみると、ブリューゲルはこの絵に、一五六〇年という年記のほかに、ひそかに「六月二十三日」という日付を暗示しようとしたのではなからうか。この画面では91種類の遊戯が列挙されるが、氷滑り、橋滑りなど冬の遊びは画かれていない。つまりブリューゲルが四季の遊戯を画こうと意図してはいないの



図2 ブリューゲル「行列ごっこ」
（「子供の遊戯」の部分㉗）



図3 「提燈行列」オランダの木版画
17世紀中期

本号で提議したのである。

78 ねずみの尻尾ごっこ Rattenstaart (図4)

市庁舎の裏側の路地から、六人の子供たちが互いに前
の仲間の上衣ないしスカートにつかまりながら、鎖状に
なって前進している。ド・マイヤーによると、彼らはみ
なつぎの歌を唱っているとい^{注2}う。

である。また左上では初夏らしい葉をつけた数本の木々がみられ、その下では子供たちが水泳遊びをしている。ゆえに季節的にも六月二十三日頃の営みと考えても矛盾しない。この「子供の遊戯」が六月二十三日という日付をもつのではないという仮説は、これまでブリューゲルのどの研究者からも提案されていなかった。しかし筆者が、77、85、87の三つの遊びが一致して「洗礼者聖ヨハネ」の祝日に関連していることから、あえてこの新説を



図4 ブリュール「ねずみの尻尾ごっこ」
（「子供の遊戯」の部分⑧）

「誰、誰が作ったか
ねずみの尻尾、ねずみの尻尾を。」

誰、誰が作ったか

ねずみの尻尾を

一、二、三」

この掛声とともに一斉にみんな百八〇度むきを変え、今まで最後だった子供が先頭になって前進する。

ハルトマン・レンスは次のような別の歌を考えた。^{註3}

「ハンスちゃん、早く歩け

あの子の服をひっぱって

あの子の尻尾をひっぱって

ハンスちゃんはしょうがない。」

子供たちにはときには行列の先頭を「悪魔の頭」、最後を

「悪魔の尻尾」と呼称したが、一定の歌が三回唱い終えるまでに、頭は尻尾を掴えなければならない、というルールである。ラブレの『ガルガンチュア物語』第二十二章でも、*A la queue au loup*（「狼行列」）と名づけているのはおそらく、この遊戯と同種のものであろう。

79 訪問jōji Bezoek ontvangen (図5)

戸口の前で黒い服を着た女の子が両手を広げ、青い服の小さな子供を出迎えている。訪問者はこの「子供の遊戯」の中でもっとも年少の子供に属するだろう。

J・ヒルズは二人の子供たちが何か歌を口ずさみながら、手を取り合っているのだろう、と推定している。^{註4}



図5 ブリュール
「訪問ごっこ」（「子供の遊戯」の部分⑨）

80 先頭の子供に従え *Eerste Mannetje achterna* (図9)

三人の男の子によるグループ遊び。まず先頭の子供が軒下の横木に登り、下へ飛び降りる。すると続く子供たちはすべてその真似をしなければならない。ド・マイヤの指摘によると、この店は馬蹄屋で、支柱に繋がれた



図6 ブリュエゲル「先頭の子供に従え」
 (「子供の遊戯」の部分⑩)

馬蹄具を打ち込んでもちろ
 のである。ところ^註でこの遊
 びは「啞の商売」ともよば
 れたが、それはすべての動
 作が沈黙の裡に行なわれる
 からである。

ドイツではこの遊戯は
 「鶯鳥の行進」(鶯鳥は陸
 上を歩くとき、一列縦隊で
 並ぶ習性があるため)とよ
 ばれた。リーダー格の子供

は最初は緩慢に、次第に速歩で歩く。また溝を跳んだり、高い所に登ったり、かなり荒っぽい行動をとるが、続く子供たちはその真似をしなければならない。最後まで真似のできた子供が次にリーダーとなるが、脱落者は仲間
 に罰金を支払わなければならない。



図7 ブリュエゲル「ベンチから突き落せ」(「子供の遊戯」
 の部分⑪)

81 ベンチから突き落せ *Van de Bank duwen* (図7)

家の前壁に沿って、一個のベンチがあり、その上にま
 たがった四人の男の子がわが国でいう「押しくらまんじ
 ゆう」をしている。この絵では三人の男の子ABCが一
 人の男の子Dと背中合わせになって、押し合いながらD

をベンチから落
 そうとしてい
 る。Dはしっか
 りとベンチに掴
 まりながら抵抗
 する。こうして、
 もしDが落ちた

列にいた子供は「マダムちゃん」という風に交代する。

この遊びについて、J・ヒルズは全く別の仕方を考えた。^{注7}それは80番の遊戯でも行なわれるが、ネーデルラン

トに古くからある「啞の商売」*stommen ambacht*という一種のジェスチャーごっこである。子供たちがある特定の職業を身振りで真似て、組んだ仲間に応じてさせるという遊びである。ラブレの『ガルガンチュアの冒険』の第二十二章にも *Aux mestiers* (「商売当り」) という遊戯の列挙があるから、十六世紀のフランスでもポピュラーだったのだろう。

なおこの遊戯の原題 *Duiké, duiké, reve* のうち *reve* を「与える」と訳したのは、あるいは *geve* の誤植ではないかと考えたからである。

84 馬のベヤールトとヘーム伯の四人の子供たち *Ros Beiaard en de vier Heemskinderen* (図10)

ひとりの男の子Aが大きな箒を両手にもっている。Aに相対して、四人の男の子が太股をひらき、互いの腰部

をしっかり掴んで並んでいる。Aはその箒を彼らの足の間に入れようとする。その瞬間、先頭の子供は箒の柄をすばやく掴み、他の三人の子供とともに馬乗りになって、疾走しはじめたAを追跡しなければならない。もしAを捕えたら、彼は列の後ろにつき、先頭の子供がAの役をする。

この遊びはド・マイヤーによって馬のベヤールトとヘーム伯の四人の子供ごっこであろうと推測された。^{注8}これはカロリング王朝のシャルマーニュ大帝(七六八―八一四)にまで遡り、大帝の西ヨーロッパの領地拡張に抵抗したドルドーニュのエモン伯(その妻は大帝の姉妹)とその四人の子供の逸話である。この物語は十二世紀に *Renaus de Montauban* という古いフランス語の武勲詩に編纂され、一四九三年にはリヨンで民衆本として出版された。続いて十五世紀末にオランダ語版 *De historie van de vier Heemskinderen* が、やうに一五三一年にはドイツ語版 *Schöne Historie von den vier Haimons-kindern* が刊行された。オランダ語版での四人の子供た



図11 「馬のペヤールト」アット市の巨人祭り
1976年



図10 ブリュージュ「馬のペヤールトとヘーム伯の四人の子供たち」(「子供の遊戯」の部分⑧)

ちの名前は Adelaart, Ritsaart, Witsaart, Reinout と呼称され、ネーデルラントでも自国の中世騎士物語としてかなりポピュラーであった。

このヘーム伯の子供を歌った詩が伝えられている。^{注9}

「馬のペヤールトは両足を高く上げる

彼は火の中で死んだのだ

尻尾にはリボンをつけ

頭には羽根をつけ

その上には四人の兄弟が坐っている。

馬のペヤールトはデンデルモンデの町を

ぐるぐる回る。

アールストの人びとは馬のペヤールトが

いまここに來たので

とても怒っている」。

筆者が一九七六年ベルギーに滞在したとき、同国の巨人祭りでもっとも著名なアット市の「巨人の結婚祭り」(八月二十八日)を見学することができた。高さ四、五メートル、重さ百キロ以上の巨大な人形が町を行列するの

であるが、それぞれの人形は旧約聖書のゴリアテとゴリアテ夫人、ギリシャ神話の勝利の女神、聖クリストファ、十七世紀のアルブレヒト公とイザベラ公妃など民衆のよく知っている主役たちであった。その中で一段と人氣のあったのが巨馬のベヤールト(図11)である。重さは約六〇〇キロで、中に六人の屈強の男たちが入り、馬をかついでいた。そしてその馬の上には四人の四才以下の子供たちが得意気に乗っていたが、彼らは担ぎ手の子供ということだった。馬の胴体には赤い掛布が、さらにその上には種々なギルドの旗がみられ、また頭部には上記の歌のような青い総が飾られ、目はタンニン色の若駒らしい皮膚の色を示すなかなかの迫力のある巨馬であった。このようにネーデルラント化した中世の騎士物語がブリューゲルの時代の子供の遊戲に、そして今日のベルギーの巨人祭りにも登場するなど、その民話の生命力の強さを真近に感じたのである。

85 洗礼者聖ヨハネの祝火 St. Jansvuur (図12)

道路の真中で、一本の松の木の下に六、七人の子供たちが焚火をしている。これはおそらく洗礼者聖ヨハネ誕生の前夜、つまり六月二十三日の祝火なのである。この夜のために子供たちは日中、山から枯木を集めたり、隣人から薪をもらったりした。ハルトマン・リッセンはつぎの歌を紹介している。^{注10}

「ぼくらは木々を取りに行こう
泥炭を取りに行こう。」



図12 ブリュエール「洗礼者聖ヨハネの祝火」(「子供の遊戲」の部分⑤)

洗礼者聖ヨハネの日のやり方で

昼も夜も、

毎年やっているように。」

ここで注目すべきは、当時、祝火のための種火はかまどからではなく、必ず石ないし木を摩擦して熾こしたものである。この習性はわが国の神社でもご神火を熾こすと



LES PETITS FEUX
Ce leur est une volupté de sauter, au cœur de l'été,
par dessus ces feux de bûche;
Mais si le plaisir de ce jeu
ne dure pas plus que leur feu
il sera de courte durée. 11

図13 クローディン・ブゾネ・ステラ「小さな火」
(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657
年より)

きに行なわれる万国共通のもので興味深い。

ではなぜ、洗礼者聖ヨハネの祝日に焚火が行なわれるのであろうか。

マイヤーの百科事典によれば、ヘロデ王がヨハネの斬首が成功したと聞き、喜びの祝火をしたという。^{註11} 実際、十二世紀以来、ヨーロッパではこの夜、祝火の囲りで人びとは踊り、跳びはねて楽しんだという。さらにその煙、灼熱、灰などは家畜を病気から守るのに効目があると信じられていたのであった。

なおブリュゲルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」にも遠景の町角で焚火の情景がみられる。ここでは炎は一階の軒下まで登り、大人も子供もその囲りに手を繋いで踊っているようである。灰の水曜日の前日、すなわち謝肉祭でも焚火が行われたのであろうか。

十七世紀のリヨン生れのジャック・ステラの詩「小さな火」には、焚火で遊ぶ子供の姿に次のような教訓の意味がこめられていた(図13^{註12})。

「これは彼らにとってひとつの悦びだ

真夏に、薪の火の上を跳びはねるのは、

しかしこの遊びの楽しみは

その火以上には続かない

悦びは短い間しか続かない。」

86 薪木を運ぶ Takkenbossen dragen (図12)

かなり年長の男の子が背丈より高い雑木の枝束を重そうに肩にかけて運んでいる。85の「焚火」のグループのひとりと考えられる。

87 松明運び Fakkel dragen (図13)

85の「焚火」の左側に手に松明をもった子供が、焚火の仲間たちに近づいていく。ド・マイヤーはこの行為を「松明を運ぶ」という独立した遊戯に考えているが、筆者はむしろ、「焚火」のグループに入れるべきでないかと考える。

88 戸口の前で歌う Zingen aan de Deur (図14)

五、六人のグループの子供が戸口の前で歌っている。

ド・マイヤーによると、六月二十四日の洗礼者ヨハネの生誕日の前後、子供たちが仮装して道路を走り回り、家から家を訪れ、卵、お金、お菓子などを貰う。その後仲間が集まり、貰いものを互いに分けあったという。^{注14}すると現在もアメリカで行なわれる十一月のハロウィーンの祭りのようなものかもしれない。しかしブリュゲルの絵では子供たちがどんな風に仮装したのかは判明できない。ただ少し離れたところにオレンジ色の服の女の子が槍のような棒を手をしているが、それが仮装の一部なのだろうか。



図14 ブリュエール「戸口の前で歌う」(「子供の遊戯」の部分⑧)

89 散歩

Wandelen (図12)

85の「洗礼者聖ヨハネの祝火」の前方に二人の子供が画面

の前方にむかつて歩いている姿がみられる。ド・マイヤーは「散步」^{注15}、J・ヒルズは「薪割り」または「指の引っぱりごっこ」^{注16}と全く別の意味に解しているが、筆者にはいずれも確証はできない。むしろ向かって右側の人物が何か雑木の小枝のようなものをついでいるのに注目すべきで、おそらくは85、86、87とともに「祝火」と関連しているのではなからうか。

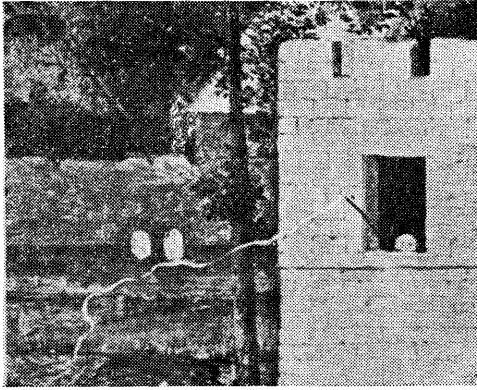


図15 ブリュエーゲル「吹流しを垂らす」
（「子供の遊戯」の部分⑨）

90 吹流しを垂らす Den Wimpel nithangen (図15)

大きな市庁舎風の建物の二階の窓枠から、男の子の顔だけがみえるが、彼は棒の先きに数メートルもある白い吹流し（というよりはリボンのようなものであるが）を垂らし、風にはためくのを楽しんでいる。ハルトマン・レンスはこの男の子は釣の真似をしているのでは、と想像しているが、筆者にはむしろ単に吹流しの動きをみているようにしか思えない。ブリュエーゲルのこの絵では、7の「仮面ごっこ」にも、この男の子のように顔だけが窓から見えるといった手法がとられている。

91 籠をぶらさげる De Korven nithangen (図16)

90の吹流しで遊ぶ男の子の右横の窓から、別の男の子が手をのばして籠を壁の釘に掛けようとしている。籠の中には一足の靴、把手には一足の木靴 Klompen がひっかけられている。もう一個の籠には柴が差し込まれている。ド・マイヤーはこの籠は「生計の憂いのない籠」

den Korf zonder zorg」という成句を表わしている、と推測^{注18}している。ハルトマン・レンスはこの男の子は大胆にも他所から籠をこっそり取って来て、それを高い窓の中に隠すという悪戯をしているのであろう、とも述べている。^{注19} いずれにせよ、この遊戯の意味は不明だが、窓に掛けられた籠は「謝肉祭と四旬節の喧嘩」にも見出される。ゆえに何かを隠したがる子供の悪戯なのではなからうか。

注 1 Paul Sartori, *Sitte und Brauch*, Bd. III, 269, Anm.

52. 現在ドイツではこの提燈行列は十一月五日の聖マ

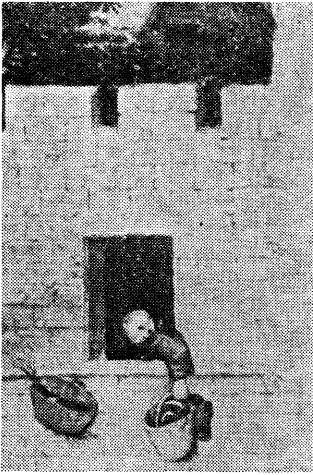


図16 ブリューゲル「籠をぶら下げる」(「子供の遊戯」の部分⑩)

ルネマンの祝祭日に行なわれている。

注 2 Victor de Meyere, *De Kinderspele van Pieter Bruegel den Oude verhandeld*, Antwerpen 1941., p. 10.

注 3 F. Hartmann en E. Lens, *Heet Joh!* Amsterdam 1976, p. 91.

注 4 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspele 1560*, Wien 1957, p. 52.

注 5 De Meyere, *op. cit.*, p. 11.

注 6 De Meyere, *op. cit.*, p. 11.

注 7 Hills, *op. cit.*, pp. 52-53.

注 8 De Meyere, *op. cit.*, p. 11.

注 9 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 100.

注 10 *Ibid.*, p. 103.

注 11 Meyer S *Enzyklopädisches Lexikon*.

注 12 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris, 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 11.

注 13 De Meyere, *op. cit.*, p. 11.

注 14 *Ibid.*, p. 12.

注 15 *Ibid.*, p. 12.

注 16 Hills, *op. cit.*, p. 54.

注 17 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 123.

注 18 De Meyere, *op. cit.*, p. 12.

注 19 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 124.

(明治大学)